

研究ノート

イヴン・アンドレーヴィチ・トレンチャコフのこと

澁谷 一郎

十八世紀後半のロシアで、ラジーシチエフ、ノヴィコフ、フォンヴィジンの、ロシア啓蒙家に少しく先だつて、六〇—七〇年代にかけて、學者および教師としての活動をした人のことは、餘りにも知られていない。近ごろ、彼にかんする二・三の論文と、不完全な形ではあるが、彼自身のオリジナルを読む機会があつたので、しるしてメモとしたい。

彼 Иван Андреевич Третьков は、ほぼ一七三五年ごろ、ベテルブルク—モスクワ街道に沿つたトヴェーリの町（モスクワから一六四ヴェルスタ）に、生れた。アンケートにたいする彼自身の回答にもとづく記録 (A Roll of Graduates of the University of Glasgow.....Glasgow, 1898, p. 616) によれば、この町にすむ士官の息子だつた。トヴェーリ神學校を修了後、ロモノソフが一七五五年以來ひらいていた、モスク

ワ帝國大學に入學した（一七六一年）。前途有望な學生とみとめられ、當時のロシアでおこなわれた習慣にしたがい、デスニツキー Семён Ефимович Десницкий (1717-89) とともに、修學のため、スコットランドのグラスゴー大學へ、派遣された。當時この大學の教授たちのなかには、アダム・スミスがおり、そのほかに著述家としては、ヒューム、ブラックストンらが彼らの注意をひいていた。二人のロシア人學生は、《數學を修得のために》、グラスゴーへ送られたのであるが、彼らは、法律學・政治經濟學・社會學のとき部門に、より大きな興味をおぼえた。二人は一七六一年に、アーンダーソン教授 Anderson, John Professor of Natural Philosophy の門下に入った。これらの遣外留學生の給與について、モスクワ大學の幹事たちは、充分な注意をはらわなかつた。二人は、一七六四年および六五年の始めに、送金を全くうけなかつた。六五年の二月二六日、二人は在ロンドンのロシア使節グロツスに、すでに一年にわたり給與の送附をうけないと、報らせざるをえなくされた。彼らは、《モスクワ大學當局の、かかる怠慢と失念は》、きわめて望ましくぬ結果をみちびくだろう、と警告する。なぜならば、債權者と、ロシア學生の教育にたいして謝金をうけるべき教授たちは、在ベテルブルク英國使節に、ことを訴えようとしているからだ。『わが國の指揮官たちにとつても、私たちにとつても、外國でのかかる苦勞は、どんなにか苦しいものにかがいないのです』送金なしには、それを切りぬけることができ

ないと、二人はのべている。彼らが、書物の支拂い・授業料・生計費を支辨する金をうけないために、ついに故國の元老院にむかつて、歎願するにいたつたのは、むりもないことだつた。當のモスクワ大學の幹事たちは、元老院の前におのが非をつくらおうとして、トレチャコフとデスニツキーが、自分たちにあたえられた資金を費いすごしたあげく、學業へ熱心に身を入れなかつた、そして彼らの學識は、『全く筋道だつていない』ものごとくであるとして、二人を非難した。

二人はまもなく、大學からの命令に強制されて、英國から呼びもどされた(一七六七年)。彼らが學業に怠慢だつたとのせしりは、全く不當であつたばかりか、反對に、彼らのおさめた學識と進歩は、當時の水準からみて、かなりのめざましいものであつた。彼らはグラスゴウ大學で、きわめて多方面の對象——法律學・醫學・數字、さらには『商業算術』⁽¹¹⁾をおさめた。二人はいずれも、一七六四年に M. A.、六七年には LL. D. の學位をとつた。後者をとるためのトレチャコフの論文は、『ローマ法にかんする——Disputatio Juridica de in jus vocando』と同じくデスニツキーは、『ユスチニヤン法典の第二八卷にかんする——De testamentis ordinariis』である。ついでに言うならば、當時この大學で、M. A. のなかから LL. D. にパスしたものは、きわめて少なく、六七年には、このロシア人學生二人だけであり、つづく二〇年間に、この學位をとつた學生は、全部で五人にすぎなかつた。(A Roll of Graduate of the...

...Glasgow, 1898, Appendices, IV.)

二

彼らはそろつて一七六八年に、モスクワ大學におけるローマ法の講座にくわつた。これは、進歩的な學者と反動的な學者たちの、はげしい戦の時期であつた。ロモノソフの衣鉢をつらうとする、ロシア人教授たち——ポポフスキー Поповский, H. H. (1730—1760)・ヤルンツォフ Ярунов, A. A. (1730—1791)・アニチコフ Анчиков, D. G. (ок. 1773—1788)・セイニン Сеилин, C. F. (1735—1802) など——は、自國の學問の發達と、自國語による講義の體系をうちたててことに、心をくだいていた。彼らはロシアの學術語を精練し、ロシア語による最初の専門研究のわずかざるを、あらわした。哲學の教授ポポフスキーは、つぎのように言つた、「ロシア語によつて説明できないような思想はない」。

モスクワ大學の最初のロシア人教授たちの進歩的な志向は、政府の支持を笠にした保守反動的な陣營の、はげしい反對にゆき當つた。後者に屬するのは、デイルタイ、ランガー、ローストその他の外人教授のみならず、シュヴーロフ、アダドゥーロフ、ハラスコフら、大學の幹事と評議員たちも、そつであつた。學問における反動的見解のみに手たる彼らは、農奴制の存續を主張し、これとともに、ロシア民衆の文化現象へ、高慢な否定的態度をしめすかたわら、西歐文化にたいする卑屈な追隨者

として、行動していた。

二人の新進學者は、言うまでもなく、ロシア人教授たちの進歩的グループにくわり、啓もうのイデーをひろめた。グループの人びとは、たゆまぬ戦の後に、自分の望むところを達した。法律學のトレチャコフとデスニツキー、醫學のズイベリンとヴェニアミーノフ、哲學のアニチコフは、ロシア語による講義へとりかかった。これはロシア文化の發展における、最大の事件のひとつであった。《モスクワ報知》紙は、「この一七六八年より、モスクワ帝國大學の、全部で三つの學部で、生粋のロシア人によるロシア語での講義が、學問の・より以上の普及のために始められた。」と報じた。

トレチャコフの研究と教授では、社會生活の研究手段として、當時は進んだ意味をもっていた比較史の方法をとった。彼はロシアの法律と法慣習の分析に當って、これをローマ法との比較によって講義した。

またそのころ、モスクワ大學教授の公開講演は、社會的・政治的に大きな意味をもっており、その終了後は大學の手によって刊行されていた。

一七六八年三月にトレチャコフは、自分の公開講演の題目の選擇をまかせるために、大學の教授會へ、つぎの四つのテーマを提出した。一、西歐における大學の發生と發展について。二、國家の發生について。三、無知・恐怖・驚がく——これぞあらゆる迷信の原因。四、國家最大の利益は、奴れいから生ず

るか、はたまた自分な身分の人びと、すなわち奴れい制の廢止から生ずるか。

教授會はトレチャコフに、第一のテーマをとるように勧告したが、これは明らかに、その性格がもっとも穩健だったからだ。

ひと月後の四月二二日、彼は第一のテーマによって、公開講演をおこなった。彼はそのなかで、つぎのことを指摘した。西歐の諸大學は、かつて支配的だったカソリック教會により、宗教上の教育施設としてつくられたのだが、後に自分のからだから教會のくびきを投げすて、非教會的文化・進んだ學問・民衆啓もうの中心とかわった。彼は大學の門戸が、社會のすべての階級にたいして、ひろく開かるべきであると立論し、古來すぐれた學者の大多數が、下層の出身であることを強調した。講師の言辭のなかに、上層にたいする《疑惑と不敵な表現》⁽¹⁶⁾みい⁽¹⁶⁾だした。モスクワ大學の學長ヘラスコフは、それ以後、教授たちの全ての公開講演は事前の検討をうけ、大學の總教授會の承認をうけてのちに始めて、印刷にまわすように、との決定をした。

翌、一七六九年におこなった、ローマ國家史にかんする報告のなかで、トレチャコフは國家の統治形態が、あるいは國の富強を、あるいは國の貧困化をもたらすことによつて、民利におよぼす影響を、考察の対象にとりあげている。

トレチャコフが残した公開講演のなかで、私たちにとり、いろいろの意味で最も興味ぶかいのは、經濟學上の問題にかん

する彼の講演『古代および現時の諸國民の、國家の豊富と緩慢な富裕化についての考案……』⁽¹⁸⁾である。この講演のなかで講師は、初期の古典學派政治經濟學の諸概念をひきながらも、國の經濟發展における國家の役割という問題について、スミスおよびその學派とは、ことなつた立場をとる。トレチャコフは、國の經濟生活における國家干渉の、合目的性と必然性を主張した。

さまざまの問題にたいする自分の見解の進歩性のため、この有能な教授は大學の當局にとつて、望まぬ存在となつた。彼は、そのあらゆる資格がそなわつていたにもかかわらず、大學正教授の任命をうけなかつた。彼にとつて、大學の内部にできあがつた環境は、明らかに不快なものだったので、ついに一七七三年、元老院へ請願をおこない、「自分に官をたまわつて、文官の勤務へ命ぜられんことを」⁽¹⁹⁾乞うた。

トレチャコフの請願は、進歩的なロシア人教授たちから逃れようと、熱望していた大學當局より、支持をうけることとなつた。この請願は、貴族戸籍局の長官官房へ回附された。それ以後にこのことがどうなつたか、彼がいかなる經歷をたどつたかは、明らかでない。明らかなのは、これらの問題が、ほう大なロシア官僚機構のなかに、うずもれ去つてしまつたことだけである。

彼トレチャコフは、一七七六年にモスクワで死んだ。⁽²⁰⁾

研究ノート

三

トレチャコフは、ミハイル教授 Michael, P. Professor Alekseev, Leningrad によれば、ロシアの「ふたりの學生」⁽²¹⁾すなわち、彼とデスニツキのうちの、より才能すくなくも、⁽²²⁾とされる。教授のかかる断定は、トレチャコフの教授としての經歷が、一七六八—七三年の短期間であり、彼の死がすぐぶる早かつたため、その才を充分に發展させえなかつたことから來ている、と思われる。そのうえに、現存している彼のオリジナルは、前述した三つの講演の刊行物だけにすぎない。にもかかわらず私たちは、ロシア啓蒙主義の流れを研究するとき、このわずかに残された三つの文獻を、忘れることができない。ことに興味ぶかいは、彼が、スミスの『諸國民の富』⁽²³⁾初版の出版に先だつ四年前におこなつた、自分の經濟學にかんする講演のなかで、明らかにグラスゴイ時代に聞いたスミスの講義に、もつづいてると察せられる部分⁽²⁴⁾が、見いだされることである。しかも全體としてこの講演が、師説の單なる紹介におわらずに、生れたばかりのロシア・ブルジョア階級の、前むきの希求を代表して、重商主義的な襍をうちだしていることに、⁽²⁵⁾注目すべきであろう。彼もまた、すべての進歩的なロシア・インテリゲンツィヤたちと同様に、専制農奴制ロシアの、先進西歐諸國にたいする、經濟・社會・文化……の後進性を重く、しく意識するとともに、一方ではその民衆にたいする愛情から、

御都合主義の貴族的ロスマネリチスム——西歐文化への盲目的な屈従を、しりぞけたのである。かくて彼は、the first pro-motor of Adam Smith's teachings from Russian University Chair であり、*「不特てこのロスマネリチスムを、ロスマネリチスムの考へて共唱したるの、著作上の證據を、われわれはたゞも殘すなかつた。」*(傍註は私下より)

ロスマネリチスムの、三つの講演の各々を、*「その深へるほど、いよいよ、その、彼の同僚に、はるかに多くの著作を、社会的影響を残したロスマネリチスムは、それそれ稱をあたへ、稱をたごつた。」*

註

(一) Ш и п а н о в, И. Я. Общественно-политические и философские воззрения русских мыслителей второй половины XVIII в. (вступительная статья в сборнике Избранные произведения русских мыслителей второй половины XVIII века. Т. I. М. 1952. стр. 5—84.)

П е н ч к о, Н. А. Основание Московского университета. М. 1952.

Е ж е. Комментарии к протоколу Университетской конференции от 22 марта 1768 г. (Вестник Московского университета) 1952. июль. стр. 172—173.)

Б е л я в с к и й, М. Т. Долонов и основание Московского университета (рукопись диссертации) М. 1952.

Б а к. И. С. Общественно-экономические воззрения И. А. Третьякова. (Вопросы Истории) 1954. сентябрь. стр. 104—113.*

M i c h a e l, P. A l e k s e e v. Adam Smith and his russian admirers of the Eighteenth century. (Appendix VII of "Adam Smith as student and professor..... by William Robert Scott." Glasgow. 1937. p. 424—431.)

彼のこの書かれた文獻は、以下に添へてある。

(2) (一) の、*「*」*を引いたもの。

(3) これは、註の(一)の最初にあげた「十八世紀後半のロスマネリチスム」第一巻のなかで、私の論文の二つの三つの講演のうち、二つが収録されたものである。また、(同書「三三一—三六〇ページ」)「不完全な形」とは、二つのいずれもが、講演の始めと終りにつけられる習慣だった職業にたゞする諸辭を、省略して再現されてゐるからである。

(4) 少し後の一七六六年に、少年侍從學校の生徒であつたラジーシチエフ、クトゥーゾフらをおくむ九人の、すぐれた若ものが、やはり同じ方式によつて、「國の未來の法律

переменах, в публичном собрании императорского Московского университета……говоренное оною ж университетом свободных наук магистром, юриспруденции доктором и профессором Иваном Третьяковым июня 30 дня, 1769 г. Печатано при императорском Московском университете.》

(22) 《Расуждение о причинах изобилия и медлительного обогащения государства как у древних, так и у нынешних народов……говоренное в торжественном императорского Московского университета собрании, июня 30 дня 1772 года. Обоих прав доктором и экстраординарным профессором Иваном Третьяковым. Печатано при императорском Московском университете 1772 года. Воспроизведено с некоторыми сокращениями в сборнике «Избранные произведения……XVIII века», т. I, стр. 353—360.

(23) П. Г. А. Д. А.……т. 5565, лл. 347-а, 348.
(24) 彼の死後については、一七七九年との説もある(たとえば、マニール教授の論文や、前掲《選集》第一巻の後註)。しかしこのことはクリヤノフスキの論證によつて、廿六年の説に軍配が上るものだとある(註に参照)。Beljanskij, Рукопись, стр. 243)。なほこの年じ、クックの『諸國民の富』初版が出たことを、忘れられなく。

(21) М и о н а е т, Р. А. ibid. p. 425.

(22) すなわち、一七七二年六月三日のこと。ちなみに、スキムスの書物の、最初のロシア譯(四分冊からなる)が、ネチンブルグに出たのは、はるかにくだつて、一八〇二—一〇六年のことであつた。

(23) たとえば彼は、分業の利益を説明する例として、pin-maker のことをあげているが、これはスキムスの敘述をめぐつて周知のものである。それ故にマニール教授も、このくだりの英譯を、脚註にかかっている。

(24) マルジョフジーが「最高の程度に革命的に行動してゐた」時代の、彼らの進歩性を、レーニンが、後の時代と明らかたに區別すべきだと説いてゐる。Д е н и н, В. И. Сочинения, изд. 4-е, т. 2, стр. 473.

(25) この線は、H. H. Шендеряев以前のロマヤに對する經濟思想の發展、すなわちマジョートル一世から、マニロン、マニヤコフを経て、ラジミチコフになつた人々とに共通する特色である。

(26) М и о н а е т, Р. А. ibid. pp. 424, 425.

資料の利用上の制約から、これらの註の、サ、ПЛАДАと《Протоколы……》は、すべて、前掲のスキュンの論文から、マニビヤコフをえなかつた。ひとごと、おごとわりしておきたる。

(一九五五・四・一八)